

10. 芸術文化学部・芸術文化学研究科

I	芸術文化学部・芸術文化学研究科の研究目的と特徴	10-2
II	「研究水準」の分析・判定	10-6
	分析項目 I 研究活動の状況	10-6
	分析項目 II 研究成果の状況	10-13
III	「質の向上度」の分析	10-15

I 芸術文化学部及び芸術文化学研究科の研究目的と特徴

I-1 芸術文化学部・芸術文化学研究科の概要

芸術文化学部の前身の（旧）高岡短期大学は、昭和 58 年に開学し、昭和 61 年 4 月に第 1 期生を受け入れた。

平成 17 年 10 月に、富山県内の 3 国立大学（（旧）高岡短期大学、（旧）富山大学、（旧）富山医科薬科大学）の再編・統合により、（旧）高岡短期大学は、新富山大学芸術文化学部が設置された。この再編統合を機に、従来の美術系学部とは一線を画した学部として 1 学部 1 学科 5 コース制でスタートし、平成 23 年 4 月に芸術文化学研究科（修士課程）が設置され、第 1 期生を受け入れた。

I-2 芸術文化学部・芸術文化学研究科の基本方針

富山大学中期目標の基本理念に基づき、芸術文化学部及び芸術文化学研究科が存続している。（資料 1-1）

「設置計画」において、学部は芸術文化の教育研究による「社会の問題解決」、「伝統産業の発展」を、研究科は芸術文化の教育研究による「高度で国際的成果の社会活用」を挙げ、他大学・学部にはない未来社会の芸術文化の先端的教育研究組織としての位置づけを目指している。（資料 1-2）

資料 1-1 富山大学の基本理念

富山大学は、地域と国際に向かって開かれた大学として、生命科学、自然科学と人文社会科学を総合した特色ある国際水準の教育及び研究を行い、人間尊重の精神を基本に高い使命感と創造力のある人材を育成し、地域と国際社会に貢献するとともに、科学、芸術文化と人間社会と自然環境との調和的発展に寄与する。

（出典：富山大学基本理念抜粋）

資料 1-2 学部・研究科の設置計画

・芸術文化学部

目的

芸術を極めることに主眼を置く教育・研究だけではなく、むしろ芸術文化に対する感性と幅広い分野の知識・技術を活用し、人間と自然や社会との関わりを見つめ、そこに存在する数々の問題を発見し、解決しようと自発的に行動する意欲的な人材の育成と、地域の幅広い伝統産業を継承し、一層、発展させることのできる人材の育成を目指し、意欲的な教育・研究を展開しようとするものである。

（出典：富山大学芸術文化学部設置目的）

・芸術文化学研究科（修士課程）

目的

芸術文化学研究科は、総合芸術を基盤とした人間の文化活動全般を教育研究の対象とし、独自の表現法とその成果の社会的活用という観点から、多角的な研究手法による実践的研究を通じて、高度な専門的知見と豊かな国際的視野を備えた人材を養成し、社会の芸術及び文化に係る要請に応えることを目的とする。

（出典：富山大学芸術文化学研究科設置目的抜粋）

I-3 芸術文化学部・芸術文化学研究科の組織概要

現在の学部・研究科の教育組織は、以下のとおりである。(資料1-3)

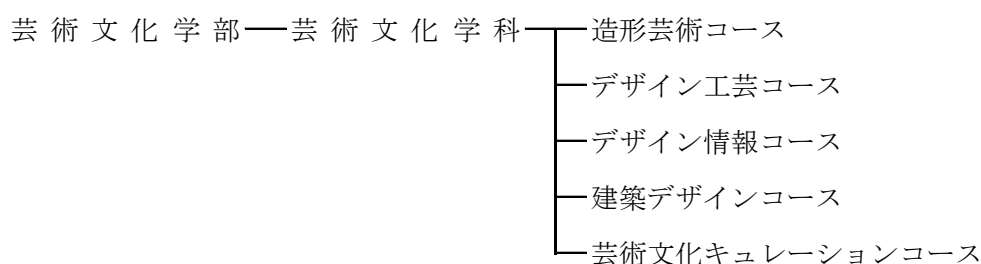
学部教員は、学生が所属する5つのコースを担当し、教員構成は、平成27年5月1日現在、教授19人、准教授18人、講師10人、助教1人の計48人である。

また、研究科担当教員は、教授20人(うち兼担1人)、准教授19人(うち兼担2人)、講師10人の計49人(うち兼担3人)である(資料1-4)。

平成27年5月1日現在の学部教員は、論文・著書などで研究成果を発表する「論文系教員」25人と、作品・デザイン等で研究成果を発表する「作品系教員」23人に区分する。

学部・研究科の設置目的を達成するため、各コースに両系の教員を混在させ、異分野の教員が融合し、学際的な教育研究活動を組織的に推進している。

資料1-3 学部・研究科の教育組織



(出典：富山大学概要図式化)

資料1-4 学部・研究科の教員の研究組織 (平成27年5月1日現在)

芸術文化学部・教育コース別担当教員 (48人)

コース名	人数	教授	准教授	講師	助教
造形芸術コース	9	5	2	2	—
デザイン工芸コース	10	2	4	4	—
デザイン情報コース	10	2	6	1	1
建築デザインコース	9	6	2	1	—
芸術文化キュレーションコース	10	4	4	2	—
計	48	19	18	10	1

芸術文化学研究科担当教員内訳 (49人)

教授	准教授	講師	計
20 (1)	19 (2)	10	49 (3)

(括弧書きは、兼担教員の人数(内数)である。)

(出典：芸術文化学部総務課作成)

I-4 芸術文化学部・芸術文化学研究科の特色ある研究目標

ミッションの再定義において、本学部では従来の芸術における教育研究だけではなく、幅広い問題解決能力の教育と当該研究を、研究科では多角的実践的教育と研究を目指し、芸術文化による地域課題の解決にかかわる教育研究を行うこととしている。

更に本学部では「地域の伝統文化」、「地場産業」をキーワードに広く社会活動ができる教育研究を推進し、研究科では「先導的専門職業人」育成の教育研究を目指している。

これらを実践するための「研究」では、「地場産業製品開発、芸術文化資源活用」などの研究を深化させ、総合的研究組織を推進することを目指している。(資料1-5)

資料1-5 ミッションの再定義

(設置目的等)

平成17(2005)年に、芸術を極めることに主眼を置く教育・研究だけではなく、人間と自然や社会との関わりを見つめ、そこに存在する数々の問題を発見し、解決しようとする意欲的な人材の育成を目的として、芸術文化学部を設置した。

平成23(2011)年に、総合芸術を基盤とした人間の文化活動全般を教育研究の対象とし、独自の表現法とその成果の社会的活用という観点から、多角的研究方法による実践的研究を行うこと等を目的として、芸術文化学研究科を設置した。

(強みや特色、社会的な役割)

【総論】

富山大学における芸術文化分野においては、芸術文化により醸成される優れた感性と創造性を社会のあらゆる場面に展開するとともに、地域における課題解決の役割を果たすべく、教育研究を実施してきた。

引き続き、上記の役割を果たしながら、教育及び研究において明らかにされる強み・特色・役割等により、学内における中長期的な教育研究組織の在り方を速やかに検討の上、実行に移す。

(強みや特色、社会的な役割)

【教育】

・学部

芸術文化分野の教育研究を通じて、地域の伝統文化や地場産業を活用し、革新につながる日本的な感性と創造力を有するなど、広く社会で活躍できる人材を養成する。

・研究科

芸術文化分野の先導的役割を担う能力を有する専門職業人を養成する。

【研究】

地場産品における新たな商品開発や芸術文化資源を活用した伝統的町並み保存等の課題に対する研究を深化させるなど、総合的な研究を組織的に推進するとともに、地域の課題解決・文化の発展に組織的に取り組む。

(出典：ミッションの再定義抜粋)

I-5 想定する関係者とその期待

① 富山県内において

富山県は、地域独自の伝統文化と伝統工芸産業を有し、戦後、銅器産業から展開したアルミ産業は大きく成長した。反面、銅器、漆、木工、和紙、菅細工などの伝統産業は、新商品開発、後継者問題などの課題が山積している。しかし、高度な伝統技術、材質特性などに国際的に注目される幾つかの伝統工芸品の例も生まれており、伝統から革新に進展できる人材育成が期待される。

富山県には典型的な地方都市、山村集落などがあり、高齢化による地域社会・文化の衰退問題を抱えている。北陸新幹線が平成27年3月に開業し、地域文化資源や、富山・立山連峰・山村風景・伝統的建造物風景などの景観資源を魅力的に観光企画する人材、新たな土産品を開発する人材など、芸術文化の専門性を活かせる課題は多い。

富山県内の行政や商工関係者、市民団体などの各関係者との連携による地域創成及び地域の活性化に関する芸術文化の教育研究成果が求められている。

② 全国において

伝統文化や伝統産業など、様々な事象は、IT社会の熟成により、世界や全国へ情報が瞬時に拡散し進化を続けている。伝統的文化資源の魅力・価値は、予想を越えた世界の人々に伝わっている。芸術文化の総合的教育研究により、地域文化を新たな地域文化に創成する人材や、その手法を手掛ける人材の育成は、高齢社会が進む中、全国の地方に求められている。

また、全国の伝統文化や伝統産業の新たな活用による地域社会創成を目指す関係者及び美術館等文化事業関係者などから、芸術文化の教育研究成果が求められている。

II 「研究の水準」の分析・判定

II-1 分析項目 I 研究・制作活動の状況

(1) 観点毎の分析

観点 1-1 研究・制作活動の実施状況

(観点に係る状況)

・研究(論文系)の状況

論文・著書等の研究成果を発表する「論文系教員」25名の研究業績は、第1期(16年度～19年度:4年間)の年度平均件数が第2期で20.7件増加、1人当たりの第1期年度平均が第2期で1.5件増加している。

また、特許出願件数、共同研究及び口頭発表も第1期と第2期を比較しても大きく増加しており、特に特許出願件数の伸びは、研究水準が向上しているといえる。(資料2-1)

資料2-1 年度別論文系 年度別研究業績状況一覧

年度	著書		論文		口頭発表		共同研究	特許出願件数		年度計
	単著	共著	単著	共著	単独	共同		単願	共願	
H22	2	7	11	10	41	43	18	2	1	135
H23	5	10	12	14	49	53	17	0	1	161
H24	3	9	7	23	21	40	14	0	1	118
H25	5	3	7	14	22	36	13	1	2	103
H26	3	4	2	23	10	37	13	2	0	94
H27	2	5	4	12	9	20	13	1	1	67
2期合計	58		139		381		88	12		678
2期年度平均	9.7		23.2		63.5		14.7	2.0		113.0
1期年度平均	12.3		22.0		48.8		10.0	0.5		93.6

※第1期の論文系教員は30名

特許出願内容

出願年度	発明者	発明の名称
H22	野瀬 正照	複合膜の成膜装置及び成膜方法(単願)
	長柄 毅一	金型異常の検知システム(共願)
	前田 一樹	小物製品に対する音付与デザイン・設計システム(単願)
H23	野瀬 正照	硬質被膜被覆工具(共願)
H24	河原 雅典	触覚誘導部材付き手摺(共願)
H25	野瀬 正照	複合膜の成膜装置(単願)
	河原 雅典	歩行補助具(共願)
	河原 雅典	背負いカバン用背面パッドとそれを取り付けたランドセル(共願)
H26	野瀬 正照	複合膜の成膜装置(単願)
	野瀬 正照	複合化膜の成膜装置(単願)
H27		

特許登録		
登録年度	発明者	発明の名称
H26	野瀬 正照	鋳造金型表面用保護膜（共願）
	長柄 毅一	金型異常の検知システム（共願）
	河原 雅典	防寒手袋（単願）
	河原 雅典	衣服（単願）
H27	野瀬 正照	複合膜の成膜装置及び成膜方法（単願）

（出典：芸術文化学部総務課調査）

・制作（作品・デザイン系）の状況

作品・デザインなどで研究成果を発表する「作品系教員」23名の展覧会や公募展等で発表した年度別の作品業績数は、資料2-2のとおりであり、教員一人当たりの年度別作品業績数は4.9件であった。

第2期の「国際水準の作品発表」の年度平均は2.0件、「全国水準の作品発表」は49.3件、「地方水準の作品発表」は45.7件であり、教員1人当たり年4.9件の作品発表を行っている。（資料2-2）

また、国際水準の作品発表は、資料2-3のとおりである。

資料2-2 年度別作品系 年度別作品発表状況一覧									
年度	国際水準の 作品発表		全国水準の 作品発表		地方水準の 作品発表		その他 (交流展等)		年度計
	単独	共同	単独	共同	単独	共同	単独	共同	
H22	2	0	54	1	57	9	4	2	129
H23	2	0	53	6	41	9	9	6	126
H24	1	0	58	8	37	8	15	10	137
H25	2	0	39	5	33	7	14	5	105
H26	5	0	45	5	30	10	12	8	115
H27	0	0	18	4	27	6	9	1	65
合計	12		296		274		95		677
年度平均	2.0		49.3		45.7		15.8		112.8
1人当りの 年度作品	0.1		2.1		2.0		0.7		4.9

※第1期の作品系教員は24名

（注1）第1期4年間の業績数は、「作品制作」592点（単独558点、共同34点）、「展覧会」241点（単独87点、共同154点）、「その他」53点（単独40点、共同13点）の3区分でカウントしたが、第2期6年間は、第三者評価を経て成果発表した件数を水準別（国際・全国・地方）に区分したため、前期との正確な比較ができない。

（注2）作品は、絵画、彫刻、メディアアート等の美術作品、金属・漆・木材等の工芸作品、プロダクト、ビジュアル、環境、建築等のデザイン作品、絵画におけるスケッチやプロダクトデザインにおけるプロトタイプモデル提案等を示す。「その他」は大学交流展等を示す。

（出典：芸術文化学部総務課調査）

富山大学芸術文化学部・芸術文化学研究所 分析項目 I

年月日	作品名	教員氏名	発表場所
H22年6月	CODON-1008 (改)	後藤敏伸	2010 宮崎国際現代彫刻展
H22年9月	CODON1009-1	後藤敏伸	上海万博富山県展示館
H23年6月	SHOW' 2011	後藤敏伸	2011 宮崎国際現代彫刻展
H23年6月	PLANES	中村滝雄	2011 宮崎国際現代彫刻展
H24年6月	鉄・予感-0121-	中村滝雄	2012 宮崎国際現代彫刻展
H25年2月	東京インターナショナルギフトショウ2013 Winter 金屋町楽市ブース会場構成	横山天心	東京ビックサイト
H25年6月	SHOW 2013	後藤敏伸	2013 宮崎国際現代彫刻展
H26年5月	ときの記憶	齋藤晴之	第7回富山国際現代美術展
H26年6月	CODON' 14 (犧)	後藤敏伸	2014 宮崎国際現代彫刻展
H26年6月	表出-鉄という物体-	中村滝雄	2014 宮崎国際現代彫刻展
H26年11月	揺れる乾漆の酒器	高橋誠一	2014 伊丹国際クラフト展
H27年2月	東京インターナショナルギフトショウ2015 Winter 金屋町楽市ブース会場構成	横山天心	東京ビックサイト

(出典：芸術文化学部総務課調査)

・外部資金獲得の状況

学部・研究科の教員が獲得した、共同研究、受託研究、寄附金は、以下のとおりである。第2期期間中の件数や金額の増減はあるが、平均19.2件、平均金額12,677千円を獲得している(資料2-4)。本学部の特色ある研究目標では、「地域の伝統文化」、「地場産業」をキーワードに広く社会活動が出来る教育研究を推進し、「地場産業製品開発、芸術文化資源活用」などの研究を深化させ、総合的研究組織を推進することを目指し、受託研究等を積極的に行っている。(資料2-5)

	H22		H23		H24		H25		H26		H27	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
共同研究	5	3,160	3	3,720	6	4,082	3	1,300	5	5,375	4	4,200
受託研究	7	5,812	4	2,487	5	5,682	2	1,973	3	756	8	8,021
寄附金	13	4,998	7	4,398	9	3,970	11	5,049	17	8,480	3	2,600
合計	25	13,970	14	10,605	20	13,734	16	8,322	25	14,611	15	14,821

※「受託研究」には受託事業も含む。

(出典：芸術文化学部総務課調査)

富山大学芸術文化学部・芸術文化学研究科 分析項目 I

資料 2-5 受託研究の研究題目	
年度	研究題目
H22	県産材を使用した特別支援学校用の机・椅子の開発
	電子ビーム微細溶融加工による医薬・医薬部品用金型の表面機能化技術の開発
	フォルツァ総曲輪シアターガイドデザイン
	多方向型 3D マウスデザイン開発
	新幹線車輦内装への伝統素材活用に関する提案作成研究
	アジアの高錫青銅器 ー製作技術と地域性ー
	精密鑄造プロセス高度化のための新たな凝固組織制御技術の開発
H23	耐酸化性にすぐれた窒化物・酸化物系ナノコンポジット超硬質保護膜の開発
	フォルツァ総曲輪シアターガイドデザイン
	電子ビーム微細溶融加工による医薬・医薬部品用金型の表面機能化技術の開発
	高齢者に配慮した照明機器の評価
H24	散居の暮らしと生活環境 ー富山県砺波市の散居を活用したゲストハウス整備に向けて
	地域の文化遺産に関する情報発信、人材育成事業
	量子ドット増感型超高効率太陽電池実用化のための革新的成膜技術の開発
	耐酸化性にすぐれた窒化物・酸化物系ナノコンポジット超硬質保護膜の開発
	フォルツァ総曲輪シアターガイドデザイン
H25	文化創造都市高岡推進モデル創出事業業務
	フォルツァ総曲輪シアターガイドデザイン
H26	フォルツァ総曲輪シアターガイドデザイン
	富山型伝統的木造建物の耐震・劣化診断手法と加工・設計手法の開発
	ガラスへのメタルコーティング技術等を用いた商品開発
H27	高岡御車山保存修理における重要有形民俗文化財の適切な修理
	フォルツァ総曲輪シアターガイドデザイン
	プログラム名/どうして古代に青銅鏡の細かい文様が鑄造できたのかー体験：鏡観察、鑄型彫り、鑄造ー
	氷見市における空き家しっかい調査の設計・調査・分析
	木材腐朽を抑制する接合具の可能性について
	県産材を使用したイベント等で用いる木製品の開発
	県産材を使用した未就学児向けの木製遊具の開発
紙材を使った家具・インテリア小物製品における表面処理方法の研究	

(出典：芸術文化学部総務課調査)

「共同研究」、「受託研究」は、大幅な変動は見られなかったが、「科学研究費補助金」の第1期と第2期の年度平均値を比較すると、年度平均獲得数6.0件から10.5件に増加し、年度平均獲得金額1,416万円から1,985万円に増加した。

なお、第2期と第2期の年度平均獲得金額を比較すると大幅に減っているが、これは、第1期の本学部創設（平成16年度）に伴う「大型寄附金」（富山県高等教育振興財団）の1億937万円が影響している。

富山大学芸術文化学部・芸術文化学研究科 分析項目 I

資料 2-6 第 1 期と第 2 期の研究等資金獲得状況の比較

(単位：千円 小数点第 2 位を四捨

五入)

	第 1 期 中期目標 中期計画 (H16~H19) ※4 年間合計		第 2 期 中期目標 中期計画 (H22~H27) ※6 年間合計		第 1 期 中期目標 中期計画 ※年度平均		第 2 期 中期目標 中期計画 ※年度平均	
	総数	期間総額	総数	期間総額	年度 平均数	年度 平均金額	年度 平均数	年度 平均金額
	共同研究	13	5,690	26	21,837	3.3	1,422.5	4.3
受託研究	22	14,906	29	24,731	5.5	3,726.5	4.8	4,121.8
寄附金	75	136,559	60	29,495	18.8	34,139.8	10.0	4,915.8
科学研究費	24	56,670	63	119,120	6.0	14,167.5	10.5	19,853.3
特定領域	1	1,700	0	0	0.3	425.0	0	0
基盤(B)	8	34,850	17	63,570	2.0	8,712.5	2.8	10,595.0
基盤(C)	9	12,620	21	25,610	2.3	3,155.0	3.5	4,268.3
若手研究(B)	0	0	6	4,940	0	0	1.0	823.3
挑戦的萌芽	6	7,500	18	23,400	1.5	1,875.0	3.0	3,900.0
研究成果公 開促進	0	0	1	1,600	0	0	0.2	266.7
合 計	134	213,825	178	195,183	33.5	53,456.3	29.7	32,530.5

※「受託研究」には受託事業も含む。

※平成 16 年度の学部創設に伴う「大型寄附金」(富山県高等教育振興財団)の 1 億 937 万円が、第 1 期の寄附金総額を押し上げた。

(出典：芸術文化学部総務課調査)

富山大学芸術文化学部・芸術文化学研究所 分析項目 I

・受賞・講演・報道の状況

研究成果が評価された「受賞」、「招待講演」は、第2期で計238件となり、年度平均で39.7件になる。第1期（年度平均33.3件）より第2期（年度平均39.7件）では、119.2%増加した。その中でも全国水準の受賞が、第1期（年度平均1.75件）より第2期（年度平均5.66件）では、323.4%増加した。（資料2-7）

資料2-7 年度 受賞・講演・報道の状況

年度	受賞			招待講演			研究に関する報道			年度計
	国際水準	全国水準	地方水準	国際水準	全国水準	地方水準	国際水準	全国水準	地方水準	
H22	0	6	2	0	3	25	0	0	7	43
H23	0	5	1	1	5	26	1	10	20	69
H24	0	3	0	3	4	21	3	1	5	40
H25	0	9	4	1	6	32	0	5	11	68
H26	1	8	2	3	5	29	0	8	30	86
H27	0	3	1	3	4	22	1	44	21	99
2期小計 (6年間)	1	34	10	11	27	155	5	68	94	405
1期小計 (4年間)	1	7	3	20	37	65	6	46	58	243
2期合計	45			193			167			405
1期合計	11			122			110			243
2期 年度平均	7.5			32.2			27.8			67.5
1期 年度平均	2.8			30.5			27.5			60.8

国際水準及び著名な全国水準の受賞一覧

受賞年度	受賞題名	著名な受賞名
H22	長年の日本伝統工芸展出品作品	紫綬褒章（文部科学省）
H22	遙か想い no. 3	第42回日展 第4科工芸美術部門特選
H23	伝統的街区を活用した文化的景観づくり	第15回ふるさとイベント大賞 奨励賞受賞
H23	屋外広告物の質的コントロールに関する研究	第45回SAD賞 特別賞 公益財団法人日本デザイン振興会会長賞
H24	旅の博物誌	再興第97回院展 日本美術院賞（大観賞）、天心記念茨城賞受賞
H26	公共用歩行補助車の研究開発	2014年度グッドデザイン賞
H26	有田市立そとはま保育所	第7回キッズデザイン賞 優秀賞
H26	X線CTスキャンと范線調査から検討する貞釣手鑄造技法の変遷－泉屋博物館所蔵青銅器について－	アジア鑄造技術史学会（国際学会）「学会大賞」
H27	樹林の家	JIA 優秀建築賞 2015
H27	木津の庄コミュニティセンター＋公園	日本建築士会連合会賞 優秀賞

（出典：芸術文化学部総務課調査）

・研究・制作成果公開の状況

- ① 毎年度発行の学部紀要に、前年度の各教員の活動報告として研究業績を掲載し公開した。
- ② 大学ホームページの「富山大学 研究者総覧」で、教員一人ひとりの研究成果を「著書」、「論文」、「作品」などに区分し、基本データと共に公開し、教員個々が逐次新規入力している。
- ③ 芸術文化学部サイト GEIBUN の「教員紹介」、「研究紹介」で、教員一人ひとりの研究成果を公開し、逐次更新している。特に作品業績については、写真等で公開を行っている。
- ④ 作品やデザインの成果物は、大学交流展や記念展などを高岡キャンパス内外で開催して地域市民へ公開している。

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

・研究（論文系）、制作（作品・デザイン系）の状況

論文系は、「著書・論文」が全体の 29.1%を占め、特許出願件数を含めると全体の 30.8%となる。これは年度平均 34.8 件に当たり、論文系教員 1 人当たり年度平均 1.4 件の研究実績を上げたことになる。（資料 2-1）

作品・デザイン系は、「国際・全国水準の作品発表」が、全体の 45.5%に当たり、作品系教員 1 人当たり年度平均 2.2 件の研究業績を上げたことになる。（資料 2-2）

1 期と比較し、論文・作品系ともに、教員 1 人当たりの研究業績が上がっており、期待される水準にある。

・外部資金の獲得状況

学部創設に伴う大型寄附金を除けば、獲得金額は、第 1 期の年度平均より、第 2 期の年度平均が 125%増加している。また、科学研究費補助金は、第 2 期の年度平均獲得数は第 1 期の 175%、年度平均獲得金額は 140%増加している。（資料 2-4・2-5・2-6）このことから、外部資金の獲得による新規の研究が促進され、期待される水準にある。

・受賞・講演・報道の状況

全国水準の受賞は、第 1 期と第 2 期を比較した場合、323.4%と大幅に増加したが、招待講演及び研究に関する報道は、若干の増加に留まった。（資料 2-7）

なお、代表的な受賞として、紫綬褒章、日展 特選、院展 日本美術院賞、グッドデザイン賞、アジア鑄造技術史学会 学会大賞、日本建築士会連合会賞 優秀賞等の他、工芸、絵画、人間工学、デザイン、鑄造技術史及び建築で幅広く著名な賞を受賞しており、期待される水準にある。

・研究・制作成果公開の状況

大学ホームページ「富山大学研究者総覧」、学部ホームページ「研究紹介・教員紹介」、学部紀要において、本学部の研究・作品活動を毎年度公開した。

「研究・教員紹介」では、写真を多用し、高校生にも分かりやすく研究内容を紹介した。

Ⅱ-2 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

(1) 観点毎の分析

観点 2-1 研究成果の状況

(観点に係る状況)

ミッションの再定義に基づき、次のような優れた研究・制作成果を上げている。

学術・芸術面

事例 ①

「デザインにおける高齢化・国際化・地域活性化における日常生活支援の研究」では、2014 年度グッドデザイン賞、第 8 回「景観広告とやま賞」景観広告賞・富山県屋外広告士会賞、第 45 回 SAD 賞 特別賞 公益財団法人日本デザイン振興会会長賞を受賞した。

(研究業績番号 1)

事例 ②

「古代高錫青銅器の材料科学的な国際調査による次世代銅器製品開発の基礎研究」で 2011 年度アジア鑄造技術史学会（国際学会）の研究奨励賞受賞、科学研究費の国際研究集会の部門で採択と、国際会議 BUMAⅧで発表し注目すべき研究として選定され ISIJ International へ掲載があった。（研究業績番号 2）

事例 ③

「古代青銅器の技術解明による現代の銅器産業の技術開発研究」では、国際的にも初の国宝丈六金銅仏を科学調査した書籍が科研費研究成果公開促進費で採択と、2013 年度アジア鑄造技術史学会（国際学会）の学会大賞受賞があった。（研究業績番号 3）

事例 ④

「日本の工芸史・美術史論考の新展開による芸術文化キュレーションの基盤研究」では、出光文化福祉財団出版助成に採択され出版と、編集委員 高階秀爾から選出され外務省が海外向けに発信する盆栽の美についての論考、渋谷区立松濤美術館に選出され欧米での Okimono（置物）研究の文献があった。（研究業績番号 5）

事例 ⑤

「先端的絵画作品制作による革新的表現の開拓研究」において、文化庁から選抜された文化庁芸術家在外研修 45 周年記念特別展出品、再興第 97 回院展で日本美術院賞（大観賞）と天心記念茨城賞受賞、再興第 98 回院展・96 回院展・95 回院展で奨励賞受賞があった。（研究業績番号 6）

事例 ⑥

「伝統的技法・素材展開による工芸・クラフト作品制作による現代的価値観の研究」では、第 42 回日展 第 4 科工芸美術部門で特選、工芸都市高岡 2010 クラフト展で高岡マテリアル賞を受賞した。（研究業績番号 8）

事例 ⑦

「建築構造デザインの研究」では、2014 年 第 7 回キッズデザイン優秀賞、公益社団法人日本建築家協会 JIA 優秀建築賞 2015 を受賞した。（研究業績番号 9）

事例 ⑧

「社会変化と向き合う、建築・家具におけるデザインの研究」では、2010年キッズデザイン協議会（経済産業省）フューチャープロダクツ部門キッズデザイン賞、2015年度日本建築士会連合会賞の優秀賞、2014年度第45回富山県建築賞最優秀賞を受賞した。

（研究業績番号10）

社会・経済・文化面

事例 ①

「古代青銅器の技術解明による現代の銅器産業の技術開発研究」では、国宝金銅仏研究が全国版の産経新聞夕刊、産経新聞朝刊、読売新聞、地方版の朝日新聞、毎日新聞、北日本新聞に掲載され、中国唐代鏡の学界定説に反する技術研究がNHK教育テレビ日曜美術館で放映された。（研究業績番号3）

事例 ②

「地域文化資源（音楽・伝統文化・文化的景観）の活用による社会問題解決の政策研究」では、NHKラジオ第2「音で訪ねる ニッポン時空旅」の番組講師を務めた。伝統的な町並み全体を美術館化して茶会を連動させる文化的景観が第15回ふるさとイベント大賞奨励賞受賞した。（研究業績番号4）

事例 ③

「先端的絵画作品制作による革新的表現の開拓研究」では、絵画作品が、文化庁や美術院、公的美術館の主催する多数の展覧会で作品展示をし、「公募展ベストセレクション2014」の「新鋭美術家展2015」出品作家に選出されるなど、多くの鑑賞者を得た。

（研究業績番号6）

事例 ④

「現代美術におけるメディア・鉄・木の作品制作による先端的美術表現の研究」では、公的美術館企画で個展を開催した。チェンマイ大学主催国際彫刻シンポジウム作品がチェンマイ大学に収蔵された。中学校教科書（美術）で、平成24年実施新学習指導要領作品掲載「新美術表現と鑑賞」にインタラクティブ作品写真が4年間掲載され、累計約15万部発行された。（研究業績番号7）

事例 ⑤

「伝統的技法・素材展開による工芸・クラフト作品制作による現代的価値観の研究」では、外務省国際交流基金が主催する「技の美ー日本の工芸」展（シンガポール）へ招待され出品した。長年の漆工芸作品制作研究に対し紫綬褒章を受章した。（研究業績番号8）

事例 ⑥

「地域活性化研究」では、「金屋町楽市 in さまのこ」を高岡市と毎年協働開催し工芸×生活×産業が同居する研究を行った。「GEIBUN オープンエアミュージアム in 環水公園」を富山県と連携開催し、作品を公共空間に展示し文化政策研究の成果を上げた。「高岡鑄物資料整備・調査事業」を高岡市と連携し、登録有形民俗文化財「高岡鑄物の製作用具及び製品」のデータベースを整備した。「富山県産業デザイン経営塾」を平成22年度から毎年開催し、地場産業の技術や地域文化を基盤に、「地域活性化戦略の方向性」を探索した。

（研究業績番号4）

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

判断事例 ① (科研費獲得額の増加)

研究部会議で専門を越えた学際的、挑戦的研究を促進し、年度平均の科学研究費の獲得額が第1期間の140%となった。

判断事例 ② (学際的研究の拡大)

地場の銅器産業に貢献する研究成果を、金属材料、鑄造技術、考古学、美術史などの学際的研究により上げた。伝統的町並みを保存、活用する研究成果を、建築、デザイン、美術史、政策学などの学際的研究により拡大した。また、理論系、制作系、材料系、歴史系、政策系などの教員による学部内の複合、融合的な学際的研究の促進を図った。

判断事例 ③ (権威ある受賞の増加)

学術論文、絵画、インタラクティブ・メディア・アート、工芸、建築構造、建築意匠の研究において、権威ある受賞、中学校美術教科書掲載、紫綬褒章受章があり、国内最高賞である幅広い分野での受賞が増加した。

判断事例 ④ (国際共同研究の実施)

中国、台湾との東アジア地域の研究機関と古代青銅器の高錫青銅材料研究や鑄造技術研究が進み、地場産品の高岡銅器の新製品開発に資する研究成果が上った。

第2期間の先端的で新規的な優れた研究 (SS, S評価) を研究業績説明書に示した。これらの業績はミッションの再定義に沿い、地域の課題解決・文化の発展に寄与する内容であり、期待される水準にあると判断できる。

Ⅲ 「質の向上度」の分析

(質の向上があったと判断する取り組みと評価)

判断事例 ②のとおり、専門が異なる学部教員による学際的研究が活発に行われ、学部教員を科学研究費等の研究分担者、連携研究者に加えて研究の質を向上したことにより採択額の増加に繋がったと判断できる。

判断事例③のとおり、紫綬褒章、国際学会大賞、国内著名な最高賞の受賞が、幅広い分野で受賞され、年度平均の件数において第1期より大幅に増えた。受賞分野が広がったことより、学部全体の研究の質が向上したと判断できる。

判断事例④のとおり、地場産品の高岡銅器のルーツの技法解明に向けて日本、中国、台湾の代表的な研究者による国際的な研究が推進された。日本からは学部の4名の教員が参画し、その成果に基づいて、平成26年度に地元高岡で高岡銅器の展望を検討するフォーラムを開催した。東アジアの青銅器通史の中で近代鑄造産業を捉えたことから、研究の質が向上したと判断できる。

また、富山県、高岡市などと連携して、地域文化、地場産業の活性化事業が、第1期より拡大し、地域活性化に関する研究の質が向上したと判断できる。

以上のことから、第1期に比べ、第2期は教育研究の質の向上度が高いと判断できる。